



能社玄圃波抄

三



春 竹杖のすけぞきさき雪のこれ
 集 夏よりもうけの宿をうたふを
 日 口きくま標のなぞあけりしき
 日 雪かぶれ雪をうたふを 西白鳥
 同 同
 続 駒鳥のねが似合き 白羽を
 飄 ちまよふは群のうらぎあをれを
 員 神ぞ雪のなふさかの 活痛
 釣雪
 竹下 例はそりの例をさぶよる例あり
 春 あまが花^たのうらみの唐痛はく
 冬 今がうらみのあまをれ川^た
 春 敏はうらみのあまをれ川^た
 くらゝ加らうらむをく 同例ありしき

○まゝ

集 竹杖のすけぞきさき雪のこれ
 この句 竹杖のすけぞきさき雪のこれ
 後 あまが花^たのうらみの唐痛はく
 竹下 例はそりの例をさぶよる例あり
 みづのうらみのあまをれ川^た
 今がうらみのあまをれ川^た
 古来はさき 竹杖のすけぞきさき雪のこれ
 句あまが花^たのうらみのあまをれ川^た
 ○又何ぞ竹杖のすけぞきさき雪のこれ

芭蕉

只葉
 竹下
 重玉

芭蕉

裁人
 左記

荒 炭 曰 曰 統 曰 曰 荒 飄 冬 炭 飄 冬 冬 飄 冬

わが身はなつそする花のあるは
この身乃鐵鬼の身とする月と花
身よりこの身を常位ぬわすをし
いふや坊主をふ説くつり
ふり鴨をた追くる 堤
葉の中や身を細くしと親葉心
五月雨や根芽をさす 市の家
編幅の花どりまつて説くしと
まつら坊主を説くあがし
外と木帽の鐘を花をさす川
はくまれくつぬ編の野をさす
色をぬきぬく臨濟をさす

路通 芭蕉 刺牛 活圃 乍木 常虎 相芳 海通 村平 荷弓 瑞秋 芭蕉

曰 統 曰 炭 集 員 曰 猿 宗 員 冬 春

僧りのそそす 歎み説の世
独を狩場のぬく遊にがし
そらぐさ中をぬけさすさ
飯の中ちるる 芋をさるる月
鳥や竹の子を教ふる 老をさるる
つる身を吹れぬやぐささ
よまむの葉を説くしと
年のねや親父をさすばしと
夜合子ら回ふのあはれ 纏
うらふ中を説くあがし
江をぬく 福樂庵とせしと
傾城をさすあけがれ

羽笠 曲の羊 游刀 嵐雪 芭蕉 相芳 釣亭 長和 野坡 望水 重五 昌圭

さすの古言にこそ。けしきくもくもくさすけし
にけしきくもくもく物とさすもくもく物と持あす
るもくもく物と。にとをくもくもくもく物と持あす
てさすもくもく物と。さすもくもく物と持あす。古言にこそ
けしきくもくもく物と持あす。さすもくもく物と持あす。今この
古言の何と考あすべし。さすもくもく物と持あす。今この
さすもくもく物と持あす。

続

つぎはさすもくもく物と持あす。本言の

猿 雅

この句。本言のさすもくもく物と持あす。家とるもくもく物と持あす。
あすもくもく物と持あす。さすもくもく物と持あす。今この
さすもくもく物と持あす。さすもくもく物と持あす。今この
さすもくもく物と持あす。さすもくもく物と持あす。今この
さすもくもく物と持あす。さすもくもく物と持あす。今この

荒

つぎはさすもくもく物と持あす。本言の

冬 松

続

つぎはさすもくもく物と持あす。本言の

春 松

炭

つぎはさすもくもく物と持あす。本言の

刺 牛

曰

馬の出ぬりもくもく物と持あす。本言の

芭 蕉

曰

肉づくもくもく物と持あす。本言の

利 牛

曰

ちとめもくもく物と持あす。本言の

同

曰

つぎはさすもくもく物と持あす。本言の

野 坡

猿

さすもくもく物と持あす。本言の

凡 兆

炭 折さるるささるるぞふくや春之所
統 八九問てさく面ある 柳の
炭 長松が親の春にくる湯屋
同 湯屋にすぎさるや野のおりこ地
統 尾張ぶくつきーしともの春もある
同 志ねぬ合意ぶくづらぬくも
炭 子を裸親さすれく子苗糸
統 湯屋くま切さる 照 降
炭 買さんぐ米ぐく身作くまもく
同 又々親も佛の食ぶく切を明
同 戸でかゝぬし居凡呂のやぬ
同 比ろあさ食くまあぐく する
同 同

統 あゝあゝぐ市の中をう押あふ
同 おりひのまろ子早福くくやあさ
但テとつ改く。この後そのデの例。あるるあり。これ
いふよちうよちうね事あねども。たさくぞ
炭 さねとたが縁起すんで甲うぐう
統 ちり粒あさりりろさに続ぶき
同 徳杖すんで奉一とあさる
炭 比をもあさすんであも神さる
統 コレハハイヅレモ。清音ナテナルガ。湯ハ俗言
ノナフヒニテ。オトヲイフハトナリ。古言ナ
ラバトナリ。アガストイフ所
ナリ。アガストイフ所
統 老の君れあさるるささるる四十薩
炭 芭蕉

猿 遊あやももせきくもさすや鳥
 日 子御子とささくぐりむらげや
 梅 榎のひあよとま〜ぐりむらげや
 日 梅 榎のひあよとま〜ぐりむらげや
 梅 榎のひあよとま〜ぐりむらげや

コレハハ...
 古言ニモ...
 キーニハ...
 カ又童...
 ナチ下ノ...

引とつらひく。倍そのでれんある例をりらにあらぐ
 荒 ちん香やると川原後江く隣ど
 猿 ちのひやつひのたりにく涅槃像
 日 ちふるく〜実やるれどの小舟にく
 日 ちふるく〜実やるれどの小舟にく

蘇白...
 コノ句意ヲ見テ...

岩 髪おろそろ雪踏と〜する雲にて
 日 惟るもえり〜う〜らぬを〜して
 荒 肩衣を〜内子に〜ゆるや売の友
 日 ちん香やると川原後江く隣ど
 集 子すれはをさよの中ふに〜す〜め
 右 ちん香やると川原後江く隣ど
 日 ちん香やると川原後江く隣ど

○又よま〜何よと〜ひり〜何すも〜あ〜を〜何する
 何よと倒〜つら〜あり〜す〜い〜何よと〜あ〜を〜何する
 何よと倒〜つら〜あり〜す〜い〜何よと〜あ〜を〜何する

とらうぐいし。せねを初めつゆにこくこを「何よ何
すまこいあまがのりもたる倒よつうあまや

冬 ちぢり束く梅子のさる西月子 枯圓

日 血力うらげ丹のくくあひ子 荷子

春 傘のうらを付キあたる雨の音子 李風

日 貝 ちぢりあまのびる桐の木子 明子

日 活きももあまをくぬくちり鳥子 松梧

日 物ごとの子魚もあたる鴨子 同

これら皆倒句のになり。又これ等解くと終又あまごる
あり

あり

猿 新を教たるこころ月うげ子 明子

このを倒句にあまごる。例句たるをよと二事

はあまごるを付をぬるこ。あまごるを倒句にや
ずとてあまごる。前句「油をすりこむ」を「油をすりこむ」
後句「あまごる」の十の意を来。この前句は倒句
よ。は例の字にうらあひらとてこく。倒句たる
たるを付ず。――

○「よをぬる」はあまごるのあり。すまこいつゆに
ふらゆ。思ふすまこい。是非おくごま思ふすまこい。す
まこいもあまごるがたか

続 ともあまごる。庚申のちのちを形。 文章十

○中よにこくひく。ジヤニジヤニ。二かごつふ借借子
わあまごる。これらもあまごるのちをたか。あまごる
あり。あまごるの事。あまごるの事。あまごるの事。あまごる

わらわちのり

瓢

ふの村ありひろきは醫術をのちのり

荷子

日

虫はこころは用このあく

乙別

日

わらわちのり七ねはねつる釣棚

朝人

集

木の葉の痕もまぶさるあは後の月

古詩

○その糸はほもをみそをみぞにほくくちのどさるりの天糸波

を纏まわつる事ついでにねをさうの條をみそを

わらわちのりをそれくつあはぬげす

続

あはぬねをくさから皮肉純

法園

日

常の歌よそを寄をたを純純し

馬寛

炭

はくは路よそを丸ちをちをす

孤屋

集

景清も花見の座まを七名清

芭蕉

続

子供よそをみ川、あはぬや花びきを

葛市

荒

むさくつをやつてあはぬやふら対面

多泉

猿

なまの猿こころをくもあはぬや

野水

荒

月あつてあはぬや一門の松

吉来

日

わらわちのりこころをみ響の音の月

芭蕉

猿

和蝶や骨をちをふらも梅のち

半猿

日

まはらふもあつてはる木樫を

山嵐

続

あはぬ魚をまきむさくつにぞ侍るこ

今方城

集

すくくつをみつがあはぬや

芭蕉

○又しきくつをみつがあはぬや

集

まはらふもあつてはる木樫を

芭蕉

炭

紙幅くくつをみつがあはぬや

其角

昔 麓にそむせむしや高のたけり口 岸より
○中々何はなれどあつては詞の中へ入りしものあり。まよを
「たつたやめをえて」ぬねるがぬねし「さうさめくれ
ちどさめりぐ」つたなり。これさうさめり乃。せんがよ
と世のものがたあつちなりゆらんあり

冬 奥の二月を口ちのみりあり 野あり

俗語より「モニモニデ」イ「サニニイ」サニデちどさめりあり

○止家

ととを。「いぬをぬれ」と我ちどさめりつらむさうり
を人よきぬり。そのぬれ。さうさめり俗語より「さ
くさくさぬれをさめり」。さうさめり六例あり。さう
ゆらぬとさうさめりを見んト聞クトサフト思フ。

ト為ルとさす玉川のぬれを。そのぬれらうらなぬれら
ふや。早き見りのぬれをさうさめりあへ。但し「ム
餘」カフベキナリ。さうさめりぬれをさうさめりあへる
ぬれらう。さうさめりぬれを。人のぬれをさうさめりあへる
るぬれらう。さうさめりぬれを。さうさめりぬれをさうさめりあへる
あへるものよすまへし本義ナリ

- | | | |
|---|--|----|
| 山 | 花えに <small>思フテ</small> 女 <small>カウリ</small> が <small>つ</small> き <small>ま</small> き <small>く</small> | 芭蕉 |
| 荒 | ぬれ <small>イフテ</small> 馬 <small>カウリ</small> の <small>ぬ</small> れ <small>草</small> | 荷号 |
| 日 | かの <small>イフテ</small> 柳 <small>カウリ</small> の <small>ぬ</small> れ <small>草</small> | 歌人 |
| 日 | おの <small>思フテ</small> 鱒 <small>カウリ</small> 引 <small>カウリ</small> の <small>ぬ</small> れ <small>草</small> | 合喏 |
| 日 | めづ <small>イフテ</small> 生 <small>カウリ</small> 海 <small>カウリ</small> 嵐 <small>カウリ</small> を <small>焼</small> や <small>の</small> 奥 | 後似 |
| 炭 | す <small>イフテ</small> 板 <small>カウリ</small> の <small>ぬ</small> れ <small>草</small> | 元峯 |

猿 志多しはあそびし^{ニテ}花身^ハ
 員 いの子^ハゆつと^ハ神鐵^ハくらゐ^ハて
 統 海^ハ軍^ハひ^ハび^ハの^ハ子^ハの^ハら^ハら^ハの^ハら^ハ
 冬 には^ハち^ハち^ハの^ハ猫^ハを^ハら^ハ張^ハる^ハ力^ハを^ハあ
 統 へ^ハん^ハ無^ハぞ^ハむ^ハと^ハの^ハあ^ハる^ハ存^ハを^ハさ
 員 かの^ハ守^ハの^ハあ^ハを^ハも^ハの^ハの^ハあ^ハら^ハの^ハま
 猿 ぬれ^ハた^ハけ^ハの^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 日 あつ^ハし^ハく^ハの^ハ門^ハく^ハり^ハ色^ハ
 日 ひ^ハあ^ハの^ハ閑^ハ寂^ハを^ハぬ^ハる^ハ山^ハの^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 日 お^ハの^ハ半^ハ紙^ハ帳^ハを^ハけ^ハる^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハ
 日 ぬ^ハる^ハけ^ハ例^ハを^ハ上^ハに^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 日 け^ハぬ^ハる^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ

つまづも明白たるものやあらはしとて子^ハ給^ハは^ハな^ハを^ハ事^ハ
 なる。これづれの天^ハ尔^ハ波^ハと^ハも^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 えん^ハく^ハは^ハふ^ハぐ^ハあ^ハら^ハう^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 へ^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 仰^ハより^ハこれ^ハを^ハ内^ハが^ハつ^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 仰^ハの^ハ内^ハが^ハつ^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 する^ハら^ハに^ハあ^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 ある^ハら^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ

荒 下^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ
 日 ち^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハの^ハあ^ハ

守武 智人
 子^ハト^ハハ^ハ假^ハ名^ハタ^ハガ^ハヒ^ハタ^ハレ^ハバ^ハタ^ハト^ハヒ^ハ香^ハの^ハト^ハテ^ハモ
 ツ^ハカ^ハフ^ハベ^ハカ^ハラ^ハ又^ハナ^ハレ^ハバ^ハチ^ハモ^ハ上^ハ古^ハ中^ハ古^ハニ^ハタ^ハエ^ハテ^ハツ^ハカ
 ハ^ハガ^ハリ^ハニ^ハナ^ハリ^ハ直^ハ古^ハニ^ハイ^ハタ^ハリ^ハテ^ハチ^ハモ^ハコ^ハレ^ハチ^ハツ^ハカ^ハヘ^ハリ
 サ^ハレ^ハド^ハ使^ハシ^ハテ^ハツ^ハカ^ハフ^ハマ^ハシ^ハキ^ハフ^ハナ^ハル^ハハ^ハモ^ハト^ハ音^ハ義^ハノ^ハタ^ハカ^ハル

モノ守ルヲヤ。誤ハ向ナドモ。ソレトカケラレタレド。コレハ
 タチノ誤ナリ。サレバ心アラフ。人ハカタクツカス
 カラヌ。ナリ。世ノ秀。約ニハカマハズ
 トイフ。我マ、ナルイヒゴトゾカシ

日 あぶ花の小乳とこゆるちぎる 荷号

猿 金鑛とくはつそきくみのやす 芭蕉

日 お留守とまねをく廣き板敷 凡兆

炭 よの田をりしこやし月の雲 芭蕉

すこの例のこころは。程々の例なきあり。

続 やれとぶおす糸の色づれ 馬寛

いねを。やうく。さうはく。ポウヤウヤウ。やま。さ。ま。ま。

つらさをあはす。さうさす。さうさ。

○又。もの。誠。こころ。例。あり。い。ね。を。よ。ま。く。あ。は。す。

や。こ。ころ。を。か。さ。こ。ころ。を。か。さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

や。か。に。ひ。あ。く。た。の。け。う。誠。む。ん。よ。ち。あ。き。こ。れ。ま。

さ。つ。ら。な。さ。び。の。あ。き。つ。あ。さ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

お。も。ん。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。

か。ぞ。ん。た。く。た。く。た。く。た。く。た。く。た。く。た。く。た。く。た。く。た。く。

あ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。

かり

炭 夢の月おさうしとさささ

猿 内苑のくまよぶあめさささ

炭 柳のや富士にやうのくささ

員 柳ちるこころ例しめささ

日 一重のくまのさささささ

つらさをと鬼のぬさささ

あき

あき

あき

あき

は例のやうにあらざるあり。

鏡

若月の花とみえく棉島

芭蕉

いふもあはれとみえくはげたり。そのよもむるも。
は例よらうにあらざるあり。その花も。かきとつたるも。
の減むるもあらざるあり。はる。みえくもつたる。
「いふ世」いふ世あらざるあり。花の例とせざる。
つたるも。

○とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。
とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。
とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。
むろの及理をねさく。おのひのさるるあり。

員

弓引の家勝角力

とらへ

舟象

瓢

いふもあらざるあり。大玉とらへて。

心香

鏡

米桶もあらざるあり。とらへて。

文考

冬

志のふしのわざとらへて。雑をつらへる。

野鳥

荒

すめとらへて。切ぬるも。北の窓

同

おのひのさるるあり。

鏡

誰ともあらざるあり。雪の鏡

卯七

荒

とらへてはるもあらざるあり。麦一夜

吾寮

○牙二例 にはとらへ

いふもあらざるあり。とらへてはるもあらざるあり。はるも。
とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。
とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。
とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。
とらへてはるもあらざるあり。いふもあらざるあり。はるも。

日

鶴のあづまのやがてく暮の月

芭蕉

河をささげつるや。さしめをぬよするらむいふ。鶴が
あづまのやがてく暮の月。あづまのやがてく暮の月。あづまの
らむいふ。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。

○てつる子天尔波を。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
登伊の及知あれを。鶴のあづまのやがてく暮の月。あづまの
らむいふ。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
かよささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
あづまのやがてく暮の月。あづまのやがてく暮の月。あづまの
らむいふ。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
どつてつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
鶴のあづまのやがてく暮の月。あづまのやがてく暮の月。あづまの
らむいふ。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。

ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
鶴のあづまのやがてく暮の月。あづまのやがてく暮の月。あづまの
らむいふ。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
○つるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。

集

あづまの竹枝を日を暮とさ

芭蕉

日

我をぬよするらむいふ

同

荒

ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。

み鱗

猿

つるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。

夢

ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
つるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
つるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。
ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。ささげつるや。

瓢 ちびちびけいごも猫をかきす
 員 ちる花よりさくもれごも 出
 宗 おう白きもさくもれごも侍ごも
 集 むすもや鯛をあげも 壺ごも
 ばいごも 羽のちくやツらうごも 羽ごも
 ○さくごもさくごもさくごもさくごも
 とすれごもさくごもさくごもさくごも
 有！いさごもさくごもさくごもさくごも
 時子さくごもさくごもさくごもさくごも

能諧天尔波抄卷之三 終

